
勇者の嫁になりたいくて (ー ー *) ♪ 2

千海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の嫁になりたくて (1 *) 2

【Nコード】

N 8 2 9 7 X

【作者名】

千海

【あらすじ】

わたくし、ベルリナ・ラコット。18歳。ファンタジーな世界に前世の記憶を持ちながら転生しました。生まれた先は孤児でしたが、前の記憶と授かった特殊スキルのおかげでまったり都会暮らしを堪能。そんなある日、運命の人に出会います。それは俗にいう勇者様ミーハー心で人だかりをかき分けた先に彼を見つけた時、私は一目見て確信しました。この人こそ私の運命の人なのだ。追っかけ女のラブコメディ、2話目です！

（前書き）

小説説明に書いてありますが、前作「勇者の嫁になりたくて」（*）の2話目です。

1話目を読まなくても楽しめると思いますが、前作を読んで頂けるとより話の内容がわかりやすいと思います。

「すまないでござる、ベル殿。魔法使い用の杖を持ってないでござるか？」

「ありますよー。って言っても1本しか持ってないんで選べませんが…」

「充分でござる。今は初級者用の木の杖ウッド・ステッキでもありがたい。ダンジョンを抜けるまで借りてもいいでござるか？」

「かまいませんよー、レプスさん。私達の仲じゃないですか♪」

心底困ったという顔をして、真っ白い兔耳をひこひこ動かしながら魔法使いのおじいさんが頭を下げた。その手には折れた星型ステッキがあり、先の戦闘で杖を破損してしまっただけらしいことが伺い知れる。

私はおじいさんへ向けた視線の延長線上に世界一愛する勇者様ブランドバッグが入るようにすかさず体をずらし、銘入り高級革袋からブツを取り出す。

＊．．＊いつ見てもひこひこお耳が可愛いわー＊．．＊

さり気なさを装ってしつかりそれを見つめる私。

名前をベルリナ・ラコットという、ごく普通の18歳。

．．．．．

ごめんなさい。
嘘いいました。

何故か毛先だけふわっとカールする茶色の髪に茶色の瞳の容姿を持つ、ごくごく普通の女子なのですが…。

実は私、異世界からの転生者。ついでに前世の記憶を持っていたりするんです。

* . . * . . * . . * . . * . . *

「ううむ…ここで“そうせい創星の杖”を差し出されても困るのでござるが…」

勇者パーティの魔法使いレプス・クローリクは、受け取った杖に視線を落しながら困惑しきった声で呟いた。

この世界でステータス・カードに「職業：魔法使い」と刻まれた人たちは、自分たちの武器？？主に杖？？を手にとることでそれと与えられた名前を認識することができるという。

これは魔法使いに限らず、剣士なら剣の名前、弓士なら弓と矢の名前、槍士なら槍の名前がわかるという仕組みになっている。ちなみにこの能力はスキル欄に記載されるものではないため、恩恵の一種であろうと言われている。ギフトはステータス・カードには記載されない。だから、いまいち原因がわからない事象についての議論は大抵ギフトのせいになる（実際それで丸く収まるそうなのだ）。

また、職業を持ちつつレベルが上がると認識できる武器の名前が多くなるというのは、この世界の人たちの語られない常識の一つである。

まあ、ダンジョンに入るために冒険者に登録しているものの、そ

の実タダの一般人である私には縁のない能力なのだが。

受け取ったものを手にしながらどことなく渋るレプスさんの姿を見て、浮かんだ疑問を口に出す。

「あれ？もしかして使えないアイテムでした？」

「いや、普通に使えるのでござる…」

「それは良かった。どうせ私が持ってたって使えないので差し上げますよー。返してもらわなくてもいいですから」

胸の高さほどに持ち上げた手のひらをブンブン振って気軽さをアピールする。

この時点で用を終えた私の視線は、既におじいさんの背後におわす愛しい勇者様を捉えていた。

??ああ…今日もカツコイイ（はあと）

自然に顔がほころぶのがわかる。

「そう簡単にくれると言われても複雑な気分でござる…ベル殿はこの杖に一体どれだけの価値があるか分かっているでござるか？手にしなくとも尋常じゃない魔^ま気が漂ってくるのでござる…“創星の杖”は世界宝レベルの杖なのでござるが…なぜベル殿のアイテム袋に入っていたのでござろうか…」

耳が悩ましい声を拾って、ふとレプスさんに視線が戻る。

魔法使いのおじいさんは普段ならピンと伸びている耳をへにやつと下げて、うんうん唸りながら八の字眉毛をつくり盛大に困った顔をしていた。

ちなみにこの世界におけるアイテム袋はマジックアイテム的な製

品で、口の広さが入れられるものの限界、容量は積んだ金のぶんだけ増やせるというシロモノだ。

「すごい杖なんですねー。じゃあやっぱりレプスさんにプレゼントしますよ」

「??さあそれを持っていつてこれ見よがしに使って下さい!そしてさり気なく勇者様の私に対する好感度アップにご協力を!!」

汚れなき好意どころか下心満載の笑顔で答える私。

「地味な棒だったんでちよつと可愛く装飾しちゃいましたが、気にしないでいただけると助かります」

あはは、と爽やかな笑いが空気に溶ける。

なにせこの杖、拾った時はただの地味な棒だった。そんなものがレアアイテムであるなど、一般人が思い至るわけがない。

たまたま家の戸締まりに使っていたところ、知り合いの駆け出し商人が「それ魔法使い用の杖みたいだよ」というので、ならば前の世界では不可能だった魔法少女の杖をリアルに再現してみよう!と思いついたのだ。失敗しても元はただの地味な棒。だからちつとも悔しくない。

記憶を辿れば、魔法少女の杖ならば何より可愛くなくては!という信念のもと、その地味な杖に様々な細工を施したのを思い出す。

前世では娘も育てており、幼児期の洗礼を受けているのだ(休日の朝のゴールデンタイムにキラキラしい魔法少女たちのアニメ番組を見ること)。魔法少女がガチで存在するファンタジーな世界に転生したからには、夢と語られたものを現実にしなければ気が済まないではないか!

そういうわけで、今おじいさんの手の中にある杖は、透明と緑と

紫の三つの星形の結晶石が頂きに配置され、棒との繋ぎ部分はレースや真珠で可愛らしく飾り付けられているという、世にもファンシ―な状態だった。

??まあ、見ようによつてはこの組み合わせ、無くはない。なにせレプスさんはとても可愛いおじいさんな訳だし…

「確かに飾りはついているでござるが、使う分には問題なさそうなのでござる。そうでござるな。深く考えずに、レアアイテムが手に入つて得したと思うことにするでござるよ」

ベル殿ありがとうなのでござる、と言いながらパーティメンバーが待つ方へ戻つていくレプスさんを物陰から見送つて、物思いにふける私。

??今日もいい仕事したなあ！

これで勇者様の私への評価はうなぎ上り！と、一人こくこく頷いて悦に入っていると、遠くの方??その距離10メートル??で少年の声がする。

「じいさんいい歳して何ニやついてんの？」

エルフ耳を生やした萌葱色のボブカットの少年シルウェストリス・ソロルくんが、短剣を宙に放り投げながら鬱陶しそうに言った。

「幸せそう…」

何を思つてそう言っているのか想像もつかない抑揚のない声で、金髪ポニーテールのシュシュ・ベリルちゃんが続く。

「杖まで持つてるなんてさすがベルだな」

青銀の髪を強力なワックスで固めたように垂直に逆立てた美中年、
ライス・クローズ・グラツツィアさんが感心したように頷いた。

「思わぬところでレアアイテムを手に入れることができたのでござる。生きているうちに世界宝レベルの杖を手に行うことができることは魔法使い冥利に尽きるのでござる」

小さいお目めをキラキラと輝かせながらレプスさんは幸せそうに杖を握りしめて言う。

そのセリフにヒクツと顔を引きつらせ、ソロルくんがこちらを見たような気がしたが、ま、気のせいだろう。

時間は短い。乙女の時期はあつという間に過ぎ去る。

だから今は子供にかまけている場合ではない。

一分一秒をも無駄にせず、愛しい勇者様の姿を見つめるべきだ。なぜならそれこそが私がこの世に生を受けた意味なのだから！

わたくし、ベルリナ・ラコット。

ファンタジーな世界に前世の記憶を持ちながら転生し、13年が経った頃、授かった特殊スキルを頼りに孤児院を自主卒業。子供が働くのが当たり前の世界だったことと、前世の記憶のおかげで、それほど生活費を稼ぐのに困ることもなく。特殊スキルのおかげで変なおじさん（別名奴隷商人ともいう）に捕まることもなく。まったく都会暮らしを堪能していたある日、運命の人に出会う。

それは俗にいう勇者様。前の世界ではゲームや小説の中だけだったのだが、この世界には当たり前前に存在するものらしい。勇者パーティが街に來ているという噂を聞いてミィハー心が刺激され。気合い充分で人だかりをかき分けた先に、彼を見つけた。

その時、私は一目見て確信したのだ。
勇者クライス・レイ・グレイシス。
そう、この人こそ運命の人なのだと。

意気込みよろしくグツと見えないところで拳を握りながら、物理的に無理がありそうな大剣を背負った黒髪短髪で右分けちょい前髪長めなイケメンさんに熱い視線を送る私。

基本無口、無表情なイケメン勇者様の追っかけをやって早3年。
彼に近づきたくて何かきっかけが掴めないかと毎日遠くから眺めている内に、さりげなく人を避けるような態度や何かに失望しているような視線の冷たさに気づいてしまった。勇者様は人格者としても有名なので、普通に接しているあたりではなかなかわかりにくいのだが。

うっかり踏み込んだら刺されそう。
それと同時に壊れそうでもあるけれど。
なんだか近寄り難いのだ。

でも実はこの前、ついに念願叶ってキスすることができた。実際は奪ったに近いが拒否られなかったので合意の上と言っていいだろう。

できればもつと話をしてみたいとは思うけど、やっぱり本人を前にすると声をかけるなど畏れ多いような気がしてしまい…。意中のアイドルを前にした時みたいな感覚は未だ健在している。

だから、私はこれまで通り遠くから眺めているだけ。
キス一回で勘違いを起こさない私はとてもエライと思う。自分を誉めたい。

10メートル先でしばらくざわめきが上がっていたが、それを収めるように低く落ち着いた声があたりに響いた。

「出発しよう」

??ああもうっ、なんという美声！（はあと）

やはり恍惚と身もだえている私を置き去りにさっさと彼らは移動を始める。今回もあつという間に姿が見えなくなるが…。

大丈夫！私には愛の力があるからね！

なんと言ってもこのダンジョンはエディアナ遺跡という“遺跡系”。なので石畳のほぼ一本道。モンスターレベルも低めの30台ということで、前回の“森系”ダンジョンとは違いトラップといえはせいぜい落とし穴程度。あとは隠し部屋を開くための仕掛けがあるかもしれない、くらいのものなのだ。

通常、ダンジョンは冒険者ギルドに登録していなければ入ることができない。レベルこそへっぽこな私だが冒険者登録は済ませているし、特殊スキル持ちなので命の危険はそれほど深く考えなくても大丈夫。

よって、気分は前の世界で言うところの中世ヨーロッパ風お姫様ツイと両手の指先でロングスカートを優雅につまみ上げ、役者よろしく灰色の石畳を駆け出す私。

好きだったラブソングのメロディを口ずさみ、スキップ&ターンを走りの間に織り交ぜながら彼らの後を追って行く。

??貴方の後をどこまでも付いて行くのが、私なりの愛の表現方法なのですわっ！！

* . . * . . * . . * . . * . . *

エディアナ王国城下町。

この国は世界で一番大きい大陸にあつて、一番大きい領土を持つ帝国と海沿いの国2つと国境を接する内陸国である。

遺跡での用事を済ませた勇者パーティの後を追つて??正確には勇者様の後を追つて、だが??城下町に戻ったのが昨日の夕方のこと。今回の用事を依頼したらしい貴族の屋敷に入つて行く彼らを見送つてから、私は予約していた宿屋に戻り一夜を過ごした。

意外かもしれないが、善良な追っかけである私はプライベートな時間まで彼をストーキングすることはない。まあ、町で偶然見かけたかなら運命だと確信してちよつと後を追いかけることがあるかもしれないが。

説明が回りくどくなるけれど、ダンジョン攻略や時間優先の依頼がくると強行日程が組まれる時がある。そうすると、その間はもちろん生活費が稼げなくなる。いくら都市部でまったり生活できるくらいの技術が私にあるといつても、定住生活と放浪生活では入るお金も出るお金もまるで違う。

稼げるときに稼ぐ。これ、放浪生活の鉄則。

だから城下町はもちろん、村や町でも勇者パーティに休息の時間ができた時、私は追っかけを少しお休みして稼ぎに走る。

そうすることで自分の善良性をアピールすることができるし、旅費の補填も済ませられるのだ。

だつてこれから先も彼を追いつけていたいんだ。

旅費が無くてそれが不可能になるなんて目も当てられない。

もちろん“いつまでも”なんていう不確かなものじゃなくて、“嫁になるまで”というしっかりとした期間設定を設けているわけだけれども。

真面目な話はこのへんでおしまいにして、翌日。

日銭を稼ごうと向かった冒険者ギルドの前で、不審な男を見かけた私。

もちろん目を合わせずに通り過ぎようとする。

「あのすみません」

「???えええええ!?!?!ここで私に振る???全身黒尽くめのフード男子だよ!?!顔みえないよ!?!そんな人の相手するの怖いからヤダよ!?!神様、スキル発動させて!?!」

と内心強く願ったが、私の持つ特殊スキルは経験上、命の危険のない発生必須イベントを回避できない…みたいなんだよね。この怪しい男子を前にしてそれが働かないということは、彼はある意味私よりも存在上位な人物だと言うことだ。なんか変なこと言ったけど、存在上位っていうのは私の造語で、存在意義が上の人のことを示す要するに、今という時間この世界において重要な人物の必須イベントなので私に拒否権はなくなるということだ。

そういうわけで、スルーできないなら関わらないことには話が進まない。

ええ、仕方ないので付き合いますよ。

私は優しいと評判のお嬢さんなんです(ふんぞり返ってえっへん!)。

あれこれ考えながら営業スマイルを貼り付けて首だけ振り返る。

「何かご用ですか?」

「いや、その首の角度辛くない!?!」

「ああご心配なく」

「はっ!俺ってばまた変な女を引つ掛けちゃった!?!うわどうしよう!?!」

男子はそう言って頭を抱えうずくまる。

難しい角度のまま静かにそれを見下ろす私。

??あ、痛…これ以上は辛いなあ。

ため息まじりに体を半回転。うずくまったままの彼の方を向く。

「ご用が無いのなら去らせていただきますが」

「あ、え？ああああある！ある、あるから行かないで！！」

ひしつ、と素早い動作で立ち上がり私の腕を抱き込む男子。

??う…………ぎゃあああつつつ?!?!

ぞぞぞぞぞ、と這い上がる悪寒に思い切り腕を振り切る私。それは言うなればGにキスされたに匹敵する嫌悪感。

その瞬間、トスッ！という何か鋭利なものがどこかに突き刺さったような音が聞こえたが、それを確かめるところではない。

??なななな何!?今の何っ!?嫁入り前の乙女の腕に抱きつくとかこの人何なの!?…………はっ。これが世に言うナンパ?前世じゃ一度も体験しなかったアレ!?え、そうなの??私ってそんなに魅力的?え…うふふ♪もう、仕方ないなあ

非モテ男子にお慈悲をくれてやるか、と態度が一転。急に上から目線になる私。

今なら何でも許せそう。誰にでも優しくできそう。

「うふふ…さあ、言ってごらんさい!私に何を望むのかを!」

背景に天使の輪っかと羽をはためかせ、極上の笑顔で女神のように語りかける。

男子は頬を引きつらせながら腰を引き気味に口を開こうとする。
あ、なんかこの態度どつかで見たことあるな。いつのデジャブだろうか？

「……………あ、いえ。あの…東の勇者が滞在している貴族の屋敷がどこなのか教えて欲しいんですけど…」

今にも消え入りそうな声が耳に届き、それを理解した瞬間、私の顔から笑みが消え失せる。

東の勇者。

それは私が愛してやまない勇者様の別称だ。由来は大陸の東の国に生まれたから。

これまた不思議な話だが、この世界の勇者は一人きりではない。もちろん数こそ多くはないが、それでも大陸に10人程度は存在が確認されている。年齢はバラバラ。若いうちは修行を主とし、歳を取れば引退する者もいるという。だから“勇者”と言えば現役層の者達を指す。働き盛りに仕事をするというのは他の職業の人達となんら変わらない。

さらに余談だが、この世界、魔王なる存在は今のところ確認されていないという。なんのための勇者？と思ったのは私だけではないはずだ。

それはさておき、自分でも驚くほど冷たい声がのどから発せられる。

「人前に顔もさらせないような人物に教えることはできませんね」

それじゃ、とその場を去ろうとしたところを、後ろ手に掴まれる。

この状況人生で2度目。
いちお言つとくが、全然萌えない。むしろ引く。

「待って！あの、これには深い理由が…ええと…その、顔出しはヤバいっていうか…」

「顔出しNGとなつ！？お前はどこの芸人だ！！」

「は？ゲイ人？俺ノンケだし、いちおう職業：勇者なんだけど…」
「嘘つけいっ！！」

間髪入れずに突つ込む私。

おつといけない。思わず口調が乱暴になつてしまったじゃないか。そんなことより溢れ出る親切心で妙な変換を入れてきたのをスル―してやったのだが、芸人という単語はないのに、ゲイもノンケも世界語として定着していることに若干の驚きを隠せない。

「なっ？！嘘じゃねえよ！！地元じゃ正直者で有名なんだぞ俺！」

「あー、はいはい。田舎者はみんなそう言うからね（遠い目）」

「信じてねえな！？くそっ！俺のステータス・カード見せてやる！勇者のステータス見れるなんて普通じゃありえねえんだからな！？ありがたく思えよ！！」

吠えながらカードを投げつけてくる男子。

私はひらりとそれをかわす。

「おまつ！避けるとか何してやがんだよ！？土ついちゃったじゃんか！！ほら！持っててやるから穴が開くほど眺めろ！！」

そう言つて自称勇者は、土にまみれたカードを服の端で拭き取つてからズイと私の目の前に突きつけてくる。

仕方なしにそれに目を通す私。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

♂

5
6
2

M
a
x

Max

X

7
/
1
0

7
/
1
0

6
/
1
08
/
1
05
/
1
04
/
1
0
$$\frac{3}{10}$$

7
/
1
0

愛

讀

護



「私より頭が悪いなんて……」

「可哀想なものを見る目で見ろな！」

「それに逃げるためのスキルが多いような」

「生き抜くために必要だったんだ！」

「女難の相が特殊スキルって…そういうのあるんだ？」

「俺だって辛いんだよ！」

最後にはorzの格好になって「大地とこんにちは」するフィールくん。

なるほど。これが持つものに不利に働く系の特殊スキルかとしみじみ思う。

それにしても女難の相とは…女難だけでいいんじゃないの？と考えて、ああ、と納得する。

「だから顔を隠してるのか。それより“師匠の愛”が神霊の加護級とは…すごいね」

そこは素直に感心する。

「…頼むからそれだけには触れないで下さい」

言うなりシクシク泣き崩れる勇者。

なんかもうしょうがないのでため息を一つ。

「貴方が勇者なのはわかった。それはいいとして、私の愛しい勇者様に何の用なの？」

* . . * . . * . . * . . *

少年勇者に出会ってから2日後。

私はいつも通り勇者パーティの後を追って、再びエディアナ遺跡の前に来ていた。

入り口に待ち受けるギルド職員を前にして彼らはおのおの武器を確認している。その中には全身黒ずくめのフード少年の姿も見受けられる。さして興味はないが、ちらりと見たところ彼の武器はロングソード的な普通の長さで質量を予想させる諸刃剣だった。しいて特徴をあげるとすれば、刃の色が乳白色。いかにも聖属性です！というオーラを発していることだろうか。

「そろそろ行こう」

「よろしくお願いしますクライスさん！」

「ははは。フィールくん、そう固くならないで」

「はっ、はい！ライスさんもどうぞよろしくお願いします」

そのまま他のメンバーとも二言三言交わして、彼らは遺跡の中へと歩を進める。

姿が見えなくなったところで、よし！と茂みから体を持ち上げる私。

「うおっ！？…ああ、ベルリナちゃんか」

「こんにちは職員さん。遺跡に入ります」

サツと鞆から冒険者カードを取り出して渡す。

カードにはどこの支部で加入したかがわかる紋章と、名前、レベルが記載されている。

「はいよ。にしても噂以上だね、君。隠密スキルでも持つてるの？居たの全然わからなかったよ」

割と若めの職員さんのせいか、いつもより親近感を覚える。

国にもよるが、ここのダンジョンのように入り口にギルド職員が立っていることがたまにある。比較的“遺跡系”に多いのは、普通の遺跡とモンスターの出る遺跡が判別しにくいためなのだろう。従って、彼らの主な仕事は、そこがダンジョンであると知らない人が誤って侵入してしまうのを防ぐことだ。入るためには冒険者カードかステータス・カードを提示しなければならない。

全く面倒なことに、出現するモンスターと冒険者のレベルに差がありすぎたりすると注意するのも彼らの仕事のうちらしく、昔はよく時間をとられたものだ。

レベルが低すぎるというのはもちろん、あまりにも軽装だとか、パーティを組んでいなければ通せないとか、女だからだめだとか。なんだかんだと理由？？もはや難癖と言っていると思う？？をつけてダンジョンに入ることを拒まれた。

まあ。そういうのは特殊スキル発動でさり気なく突破してきたわけだが。

そうやって無事に帰ってくる姿を見せ続けたらギルドでちょっとした有名人になってしまい、職員さんが言うようにたまに変な噂が流れるようなのだ。

レベルがレベルなので特殊スキル持ちであろうというところまでは推測されているものの、それがどんなものなのかまでは把握していない。よって噂には尾ひれがつくことつくこと。馬鹿みたいな話をいちいち相手にしたって仕方ないので、私はそれを振られても無反応で返すことにしている。

「そんなに立派なスキルなんて持ってませんよー。たぶん存在自体が地味なんで気付かれにくいだけなんだと思います」

卑下する訳ではないが真実に一番近いとおぼしき理由がそれなのだから仕方ない。

きっぱりはつきり明るく言ったせいか、職員さんが嫌みのない声を出して笑う。

「ちょっと前に一回入ってるし“失意の森”から無傷で帰ってきたそうだから、そのレベルでも問題ないと思うけど。一応、足下に注意するんだぞ」

返された冒険者カードを受け取って鞆にしまいながらぺこりとお辞儀する。

「はい。ありがとうございます」

「？いやー、今日は早かった。いい人で良かったなあ」

幸先がいいとはこういうことを言うのだろうか。

私は背の低い草が生い茂った庭のような場所を抜けて、灰色の遺跡へ向かいながら鼻歌を歌う。その途中、当時は水がためられていただろう池の名残を見つけて、覗いてみようと思いつく。

干上がった池の跡には枯れ草や落ち葉が溜まり、その上で新たな命が根を下ろし最盛期を迎えていた。

こうして誰かの住まいだったものが緑に飲まれ、いつか土の中へと埋まっていくのかと思うと、人の生きる時間はなんて短いのだろうと感慨深くなる。私たちの一生は星が歩む時間の一瞬でしかないのだ。

ほつつと憂いを吐き出したところで、陽の光にキラリと反射するものが目に入った。

草をかき分け、かぶさった土をどける。

?? Oh! 貴金属の鍵だね。アンティークな感じでペンダントトップによさそう。いただきっ」

早速いいことあったわー、とほくほく顔でその場を去る私。

しばらく庭を進み、薄暗い入り口が見えたところで聞き慣れた声を捉える。今日は最初のエンカウントが早いなー、なんて思いながら、小走りで物陰になりそうな壊れた柱の後ろに陣取り、そっと顔をのぞかせる。

「ブレイズでござる！」

真っ白なウサミミをひこひこ動かして“いつものように”魔法使いのおじいさんが炎系魔法を発動する。

シランラー　なエフェクトと共に現れた火柱が“いつものように”狙った敵を穿つ。

かと思われたのだが…。

単体攻撃用と言われていたその魔法は、なぜか狙った一体のみならず進路をふさぐ複数のモンスターを一度に焼き尽くしてしまった。

「…すごい火力」

巨大な弓を携えて獲物を狙っていたであろう姿勢のまま、金髪ポニテのベリルちゃんがぼつりと呟く。

「ちょっとじいさん！前衛居るのにやり過ぎだー!!」

エルフのソルルくんが噛み付くような剣幕で叫ぶ。

「いやあ、びっくりしたけどオレ達は無事だよ」

のほほんとした声でライスさんが槍を掴んだままの右手を振り振り、勇者様と共に物陰から姿を現した。

「おい、あの勇者は？」

「…死んだ」

「ばっ…お前、疑問符くらいつけろ！」

抑揚のない少女の声にソロルくんがすかさずツツコミを入れる。

常時なら「勇者？興味ないね」と言いそうなものだが、先の魔法の威力を目の当たりにして冷静さがどこかへ飛んでしまったのかもしれない。

と、そこへ答える声がある。

「大丈夫です！生きてます！」

少年勇者がおよそ70メートル先の突き当たりの角から声を張り上げる。

無表情でそれを見つめるソロルくん。

元の場所まで戻り、息を整える彼に声をかける。

「…あの瞬間によくそんな遠くまで逃げられたな、あんた」

「いやあ、なんか嫌な予感がしたもので（照）」

「おお。さすが若くても勇者だなー」

ライスさんのゆるい声にいきなりアットホームな空気が流れ、ソロルくんが苦い顔を浮かべる。

そこへレプスさんが申し訳なさそうな顔をしてやって来た。

「す…すまないのじゃねえ…」

まさかこんなことになるとは…とモゴモゴ口を動かしながら彼らに謝罪している。

「記憶が正しければ、その杖で魔法を使ったのは初めてだと思うが？」

「クライス殿の言う通りでござる。前回は援護するまでもなかったのでもござるよ」

「悪いが、見せてもらっても？」

とても深い、味のある声が耳に届く。

??ああ…この美声でおなかいっぱい、胸いっぱい（はあと）

好きな人の声は多少距離があってもはつきりと聞き取れるものだ。うつとりと余韻に浸る私の視線の先で、勇者様がレプスさんから杖を受け取った。

「……………」

「どうでござるか？クライス殿」

不安気に問いかけるおじいさんに、勇者様はロッドに手を添えたまま落ち着いた声音で答える。

「そうせい創星の杖・改”になっているな」

「ベル殿が地味だったから装飾したと言っていたでござる。宝石とレースが付いたからでござろうか」

「…………いや。そんなに易しい改変じゃないようだ」

「どういうこと？」

やはり常時なら「他人の持ち物？興味無いね」という態度のソロ

ルくんが、二人の側まで近づいてきて問いかける。

「表面に彫られているこの模様は魔力の増幅回路のようだ。威力×10というパラメータが付加されている」

「増幅魔法陣はせいぜい2倍までの効果しか証明されてないはずでござるか」

こてん、と首をかしげてレプスさんが返す。

「だが、明らかに後から付加されたものだ。“創星の杖”の基本効果は

ラック
幸運度の上昇、
クリティカル
致命傷攻撃発生率の上昇、

広範囲魔法ノヴァ・エクスプロージョンの発動許可、

瀕死時における奇蹟ミラクルの発生…で間違いないだろうか？」

「その通りでござる。某にもそこまでは読めるでござるよ」

杖の効果を確認し、二人は頷き合う。

「その後にもまず“発動時の威力×10”と記載されている」
「まず？他にもあるの？」

横から割って入った少年の方を見て、勇者様は続ける。

「そうだ。次は“発動時におけるエフェクトの追加”」

「確かに白い星がきらきらしたような気がするでござる」

「ふーん」

「次に“使用者への致命傷攻撃無効”クリティカル」

「…無効でござるか」

「…無効だって？」

「最後に“^{バロン}聖獣召喚許可”」

「……杖なのになぜ聖獣が召喚できるのでござるつか？」

「……なんでだ？」

・ ・ ・ ・ ・

??えへっ

レプスさんの不安げな視線とソロルくんの訝しげな視線を受けて、私は笑顔で誤摩化すことを選択する。

二人がいつまでも私から視線を外さないことに気づいたのか、勇者様のお顔がゆっくりとこちらを向くのが見えた。

??きやあああつ!!! そそそんな不意打ち卑怯でござるゝつ
!! つてレプスさんじゃないけど! 今スローモーションだったのよ
! ねえ誰かわかる!? 漫画の効果でよくあるアレよ! ヒロインが恋
焦がれる憧れのあの人が振り向くシーンで多用されるアレよ!!! 視
線だけで私を逝かせられるのは勇者様だけだわっ!!!

久しぶりの正面勇者様?? それは勇者様を正面から眺める構図?
? の展開に脳内テンションが上がりすぎて危うく意識を失いかけた
私だが、愛する人の目が事情を説明して欲しいと訴えているのを感じ、
物陰から意を決して上半身を持ち上げる。

「はい! 解説させてイタダキマス!

まずはそれを持った可愛い魔法使いさんがへっばこ魔力でも大丈夫なように、増幅魔法陣を彫り込みました！あ、魔法陣は古い魔法書に書いてあったのを直列つなぎで10個ほどコツコツ転写しただけですよ！

それから、振った時にシャランラー　なエフェクトが現れるように幻石をはめ込んで、ついでにソーラーエネルギーよろしく大気に漂う魔力でまかなえるように魔力路を構築し、電池の役割を果たす魔石を追加しました！

また、不測の事態から使用者を護るために守護石も加えました！あ、もちろん杖を握っていれば効果があるように設計してあります！

あとは、可愛い魔法使いさんには可愛い小動物が必要不可欠ですので、幻獣が宿ると言われている召喚石を杖の中に仕込んでみたりしました！

石はどれも星形にカットしてもらって見た目をよくしてますし、ふわふわレースも宝石も可愛いくセットしてます！私の自信作です

「

シュタツ！と右手を上げて宣誓する。

「ちなみにその杖を作り終えたところで細工スキルが4段階もアップしました♪」

一通りの説明を終えてやりきった感に浸った私はそつと腰を落착かせる。

すると、そこに少年の叫びが割って入る。

「だから、お前一体何者だよ!？」

見ればソロルくんが頭を抱えながらうなっていた。

静かにしていればすごく可愛い坊やなのに。

いやはやなんとももつたいない。

今度こっそりアドバイスしてあげようと、私は腕を組みながらうんうんと首を縦に動かした。

「ベル殿：増幅魔方陣が書かれている古書は帝国の大図書館の禁書棚にしかないはずなのでござるが、どうやって借りたのでござるか？」

「え？落ちてたのを拾っただけですよ？そのあとちゃんと返して館長さんに感謝されました」

「しかも幻石などよく手に入ったでござるな」

「ああ、きれいな石だなーと思って拾ってきたら幻石だったんです」「それに守護石というと希少石の中でも人気があつて値が張ると思うのでござるが…」

「うーん。実はそれも落ちてたのを拾ったので懷は痛んでないんですよね」

「召喚石までになると、もうどうやって手に入れたらいいのか想像もつかないのでござる」

「そう言われてもただの拾い物ですしねえ」

「お前拾つてばっかだな!？」

ソロルくんが再び会話に入ってきたので、私は華麗にスルーした。なんだよもう。うるさい子など無視だ、無視。

そこへ勇者様が絶妙のタイミングで口を開く。彼は空気を読める男でもあるのか!と感動する私。

「今一番の問題は威力が10倍になっていることだ。使つ魔力を今

までの1/10に調整することは可能だろうか？」

「そうでござるな…少し練習の時間をもらえればできると思つのでござる」

「なら、慣れるまでしばらくクロリーク一人に戦闘を任せる。俺たちは援護に回り、積極的に手出しはしない。これでどうだろうか？」

「わかった」

「かまわないよー」

「それしかないでしょ」

パーティメンバーの了解の意を取って、勇者様は残る彼を見る。

「フィールも協力してくれるか？」

「はいっ！もちろんです」

どこか嬉しそうに返す少年に、すまない、と勇者様が返す。

何はともあれ、戦闘を10回ほどこなしたあたりでレプスさんは魔力コントロールを覚え、その顔に笑みを戻した。

ここがレベルの低いダンジョンだったこともある。
だから私たちは、どこか油断していたのだと思う。

* . . * . . * . . * . . *

「なんでこんなことに…」

はあ、と何度目になるかわからないため息が横から聞こえて、思わず眉間にしわを刻む。

無言のままずっと我慢していた私もそろそろ限界が近い。

??あのね！それはこっちのセリフだからね！?

本来ならば隣に居るのは彼ではなく、愛しい勇者様だったハズなのに。

理不尽な状況と年下という認識と慣れにより、少し前から私の口調は気安いものになっていた。

前人未踏の地下遺跡で地上に通じる階段を探しながら歩き回り、すでに5時間が経過している。鍛えた経験のない私の足はずいぶん前から痛みを訴えており、鎮痛剤をかじりながらの徘徊だ。

ひっそりとした回廊は所々に蛍光石が埋め込まれているらしく、暗闇にほんのり明かりを灯している。とは言え、心もとない光量であることに変わりはない。いつそ真つ暗なら腹をくくれるだろうに、その微妙さがかえって不安を煽る。

時折、居室のような小部屋が現れるが、どういう訳かそこには人の生活の跡がない。

一言で表すならこの地下遺跡は「不気味」だ。
ただ、ここにはモンスターの気配がない。

レベル35の少年勇者と二人きりという不安要素てんこ盛りのこの状況において、それだけが不幸中の幸いというやつだろうか。

ゲーム初期に訪れるダンジョンで、進入できなかった場所からさらに奥に進むことができるようになると出現するモンスターのレベルが上がる、というのはテンプレだ。

「あの角曲がったら休まない？」
「賛成。さすがにオレも疲れた」

いくつめになるのか覚えていないが、それまでと同じように回廊の角を曲がる。

「……………広間？」

「……………だね」

6メートルほど先に広い空間から漏れるような光が射しているのを見て、私たちはどちらからともなく歩みを止めた。

「…ものすごく嫌な予感がする」

「おお。気が合うねー。そういえば危険回避のスキル持ってたんだっけ」

彼のステータス・カードを見せてもらった時、“回避”という単語に目を奪われて、そこだけは特にしっかりと記憶に残っていた。なるほど。これはユニークモンスターと戦闘できるイベントか。ならば途中で敵が出てこなかったのも頷ける。

???だとすると…

「あそこにいるモンスターに勝てたら地上へ戻れるという仕組みかな？」

「…先に言つとくぞ？オレには無理だからな？」

「勇者なのにな？」

「職業がなんであれ今のオレのレベルで勝てるとは思えないんだよ！」

それに、とどこかバツが悪そうにして。

「ここで調子に乗って挑んでオレが死んだら、あんた一人になるだ

る。こんな気味の悪いところに女を一人きりにさせるとか、男としてありえない……」

フードのおかげでどんな顔をして言っているのか知れないが、まさかの紳士発言に私は思わず固まった。

全くなんということだ。

これだから。

これだから勇者って人たちは……。

ふ、と息を吐きながら固まった体を緩める。

「ベルリナだよ。名前で呼んで。あんたって言われるよりはいい」

突然の自己紹介に虚を付かれたのが、フィールくんはキョトンという態度を返した。

「私ね、もういいかげん足が痛くてたまらないの。愛しい勇者様の姿が見られない状況が続くのはストレスフルね。そろそろ我慢の限界よ」

だから。

「守ってあげるから付いて来なさい」

無理矢理左手を取って、明るい方へと歩みを進める。

「は？え？ちよっ……」

つんのめりながらも彼は手をひかれるままに付いてくる。

ユニークモンスターが居ると思われる広間まで、あと1・5メートル。

「いい？絶対この手を離さないでよ？つながりが途絶えたら命の保証はできないからね」

「いや、だから、何言って…」

私は発展途上の同じ目線の高さの彼にフード越しに視線を重ねて、意地悪く笑ってやった。

「私、フィールくんより断然使える特殊スキル持ってるの」

「クライス殿、トラップが復活したようござる」

兎耳の魔法使いがそれを伝えると、黒髪の勇者はメンバーを振り返って頷いた。

「後を頼む」

「ちびっ子達は責任を持って守るから。早くベルとフィールのここ行っであげて」

「誰がちびっ子だ！こんな低レベルのダンジョンで僕がどうにかなるわけないだろー！」

「…同感」

いつもと変わらない彼らの姿にクライスは再度頷く。

「行ってくる」

レプスに視線で合図を送り、隠しトラップを発動させる。

遺跡最奥の“祈りの間”で目的のアイテムを収集することができ、気が緩んでいたのだろう。偶発的に作動したトラップに自分を庇うように出てきたフィールとベルリナが巻き込まれ、姿を消しておよそ4時間が経過していた。

早速起動したトラップに乗ると、次には薄暗い部屋の中に居た。何もない部屋の中から木戸の向こうを探るが、モンスターの気配はない。

右手を持ち上げ、手のひらに魔法陣を描く。

『はあい』ご主人様。今日はどんなご用かしら？』

鈴をこころがしたような声がして、魔法陣から半透明な小人が腰から上だけを持ちあげて小首をかしげた。その背中の薄羽根が一定の周期ではためている。

「先制攻撃をセットしたい」

『お易いご用です』ここは迷宮のようですので、分かれ道では行き先を指定してくださいませね』

そう言っただけの小妖精は残る下半身を陣の中から引き上げる。そして、くるんと一回転し一礼すると、木戸の隙間からさっさと外へ出てしまう。

『さてご主人様。まずは左右、どちらへ向かいましょうか？』

そこには予想していたよりも奥行きのある空間が広がっていた。

高い天井には光石^{（みつはき）}が惜しげもなく使われていて、地下だというのに昼のような明るさである。

半球状の空間の中央には遠目にもそれとわかる巨大な獣が伏しており、その丁度真上には意味深な鎖がぶら下がっている。

漫画のように横でぐくりと生唾を飲み込む音がして、思わず口がすべる。

「見てごらんフィールくん。あそこにてっかい毛玉が転がっているよ」

「…は？」

「だから、でっかい毛玉が」

「いや、それはわかったから。それより俺たちのこの状況の方が深刻な問題じゃないか？」

神妙な声で言う勇者に、正面を向いたまま反射的に眉をしかめる。

「……くそう！この男、私のささやかなボケを無視しやがった！！あれか？ボケるのを内心ちよっと恥ずかしがったせいでボケレベルが一気に下がってしまったのか！？っていうか、冗談のわからない男だな、フィールよ！せっかく気を利かせて緊張をほぐしてあげようと思ったのに！！」

雑な言葉で憤慨する私に気づかぬまま、彼は再び口を開く。

「ボス戦なのに男女がお手々つないで登場とか、ないだろ」

「もういいよ。君に理解を求めた私が馬鹿だったから。ほら、さっさと行くよ」

渋るフィールくんの手を引いて巨大な犬っぽいモンスターへ近づいて行く。

案の定、私の特殊スキルの効果か、ユニークモンスターはすすや寝息を立てて気持ち良さそうにお休みしていた。

見事な濡れ羽色の体毛が覆う腕に足を乗せたところで、フィール君が焦ったように手を引いたためバランスを崩しそうになる。

「何をする」

「いやいやいやいや。それこっちのセリフだからね！？何、躊躇なく乗っかるうとしてるわけ？？いくら寝てるからって大胆すぎやしませんか！」

「だってそうしないとあの鎖に手が届かないじゃない。あれすごく怪しい。引つ張るべきだと思う」

「怪しいなら引つ張らない方がいいんじゃないの！？オレ的にやめた方がいいと思うんだけど！」

「面倒だな危険回避^{その}スキル。でも早く帰りたいしなあ……」

少々躊躇ったが、私は再び犬の腕に足を乗せた。

「ちよっ！？あーもう、わかったよ！だから女なんか嫌なんだよ！」

小声でわめきながらも彼は片腕でヒラリと犬の背に乗ると、繋いだままの左手で私を引き上げてくれる。

「グッジョブ フィールくん」

私は親指を立てて差し出した左手をそのまま鎖に持って行き、蛍光灯の紐を引く要領でそれを引いた。

と同時に。

目の前に広がる世界は一瞬のうちにモーションを切り替え、すべてが呆れるほどゆったりとした速度で動いていく。

迫り来る黒い陰に目を奪われて、瞬きを一つ。
衝撃と、浮遊感。さらにもう一度、衝撃を受ける。

『くくく…私の領域に久方ぶりの闖入者よ。滅多に人は訪れぬ故、飽いていたところだ。ひとつ我が相手をしてやろうぞ』

艶のある妙齡の女性の声が空間にこだました。

天井からぶらさがる鎖の中段に魔法陣が現れて、ゆっくりと逆さまのまま姿を表したのは妖艶な美貌の中年女性だった。その姿は人に似ているが、雰囲気があきらかに「違います」と言っている。

??え…えーっと…おかしいな。いや、おかしくないか。この人が目的?のユニークボスで、さっきの犬は前座だったのか。どうりで弱そうだと思った。いくらスキルが発動したといっても「寝てる」とかなさそうだし…。それはともかく、右手は、と…?

ずるりと自分の体が下がったのを感じて、ようやく置かれている状況を把握する。

鎖を引いたら現れたとおぼしき人型のモンスターを目にしたフィールくんは、目にも留まらぬ速さで私を抱きかかえ犬の上から飛び退いた。その際、繋いでいた手は解かれ、私は冷たい石畳の上にいるの間にかあひる座り。フィールくんは剣を抜いてすでに敵と対峙している。

何この置いてけぼり感。

と、ちよつと憤るも、最悪なシナリオが脳裏に浮かんで見えてゆるゆると首を横に振る。

「とりあえず待て！少年よ、戻ってこい」

「…できるだけ時間かせぐからさ。逃げきりなよ？」

「だから、話を聞けつてば！」

「地上に戻る方法…ベルリナなら見つけられるさ」
「ええいつ！微妙な死亡フラグを立てるな！！」

叫ぶと同時にギン！と金属の擦れる嫌な音がして、ビクツと体のはねる。

『ほづ…ならば、こちらは？』

艶やかな声がした方を見やれば、黒い固まりが残像を残して次々と切結ぶ光景が飛び込んでくる。

やや押し気味な様子に、言う割になかなかやるじゃないかと思うも、年上女性の体の運びにはかなりの余裕が伺えた。

あ、これはやはりフィールくんの負けだなと顔がこわばった時、何かがはらりと散り、女性が一気に距離を取った。

『小癩な…』

蠢惑な口元が歪む。

レベルの低い私には彼らの戦闘の軌跡はおおざっぱな残像でしか認識できなかったが、察するにフィールくんはなかなか器用な剣さばきで彼女の攻撃をいなし、どうやら自慢の白髪はくはつの一部を散らしたらしい。

『『『 ブラスト 』』』

状況把握に努めていた私の耳に、こだまする声が響く。

やばい！ととっさに足に力をいれたところで、何かの黒い陰が私の陰に重なった。

???うおう、犬！？すっかり忘れてたよ！まさか私の死因、ネコパ

ンチ！？

大きな肉球が眼前に迫ってくるが、弱小冒険者の私には避けることなどできはしない。

反射で目を瞑ったあたりで重いもの同士がぶつかる鈍い音が聞こえ、強風が頬をかすめた。

「なんで逃げてないんだよ！？」

衝撃がない上に怒声を聞いておそろおそろ目を開けると、視界から犬の体が消えていた。

風が吹き抜けた方に目をやれば、犬は丸めた体を伸ばしこちらへ駆けようとしているところだった。

正面に視線を戻し、急いで手近にあった黒衣の端を握る。

「なん…」

続く言葉を遮るように前方で轟音が弾けた。

不満を露に振り返ろうとしていた少年が驚いて前を向くと、圧倒的な質量を予測させる風の塊が硬い何かにぶつかり一つ二つと弾かれていく光景が見えた。

「無事か？まさかこんなところに魔人が潜んでいたとは…」

視界の端でふわりと黒髪が浮く。

深い声がした方を見れば、大剣を手にした彼が私たちを庇うように立っていた。

「??ああああ…!!!!言っていていいですか!?言っていていいですよね!?!?ここで言わなきゃいつ言っただって話ですよね!?!?じゃあ、せ

「のっ……」

勇者様、キタ??。＊・ゝ（　　）ノ・＊。??ッ!!!!!!

「え…あ…クライス、さん？」

その時、逃しきれなかった風がぶわつと吹き付けて、フィールくんのフードを取り払う。

黒から放出された白群ひゃくぐんの糸が、しなやかに空間を舞った。同時に、やや不健康そうな象牙色アイボリーの肌が目を奪う。

それは勇者様の登場で有頂天な私を一瞬で覚醒させる破壊力を秘めていた。

??…なんという美少女ばりの配色…!!くっ…薄々シヨク感づいてはいはいたけれど、きつと、顔の作りは女性受けする美少年シヨク顔に違いない。女難の相…恐るべしっ！

何かに打ち拉がれた感が体を襲い、私はがっくりとうなだれる。そこへ少し動揺したようなフィールくんの声がする。

「エル・フィオーネ…？」

『なんと!?!その魔眼!まさか!!!』

ひらりと優雅に身を翻し、魔人は少年の前に降り立つ。あまりの速さに勇者様もフィールくんも体がこわばった気配がしたが、女性はおそろおそろといった手つきで象牙色の頬に触れ、何かを確かめるように瞳を重ねた。

『…ああ、恐ろしい。うつかりヌシを殺してしまうところだった。この輝き…なんと懐かしや。千と百余年待ってようやく相見えた…アーサー…我が、伴侶』

そう呟いて、うつとりとため息をこぼす。

??あれ?もしかしてこれ、特殊スキルの発動結果?ユニークボスとの戦闘がいつの間にか邂逅イベントに...ともかくフィールくん、思いがけず熟女 get だね!...いきなり熟女とか...だってさ、ハーレム作成って普通、初期は元氣系か健氣系の少女たちだよねえ。熟女って後の方だよねえ。さすがだわー。

目の前で繰り広げられる光景をぼんやり眺めながら、スキルってすごいんだなあとしみじみ思う。この場合どちら??私orフィールくん??のものが上位で発動したのか不明だが、もはや命の危機は去ったと確信して良さそうだ。

安心した私は二人の世界に入ってしまったらしい彼らを通り越し、愛しい勇者様を見つめる。

彼は凛々しい立ち姿で、少し離れたところでお座りをして待っている犬のほうに視線を向けていた。剣はまだ鞘に納められていないが、さすが空気の読める男。背後でいちやつき始めた彼らをものに見事にスルーしている。

「.....あの、オレ、貴女に会った事ないですし、フィールって名前なんですが...?」

態度を一転、頬をひくつかせながら少年勇者が答える。

『今生の名はそう申すのか。ではそう呼ぼう。見えているだろうが、我の名はエル・フィオーネ。魔種の序列にして公爵を務めておる。又シが覚えておらずとも、その眼がすべて覚えておろう。さて、愛しい其方に付いてゆきたいところだが、惜しむらくは我が囚われの身の上であることか...』

心から残念そうに、彼女は自分の腰に下がった鎖が繋がれている錠前をすくい取る。

その仕草の上品なことと言ったら。まるで艶あでやかな日本画のようではないか。

??ん？錠前とな？？

「あの、もしかして鍵かぎってこれですか？」

取り出した拾い物の貴金属の鍵に、一同の視線が集中した。

??やんつ そんなに見つめちゃいやんつ なんてねー。すっごい寒いけど、一回言ってみたかったんだよねえ。

* . . * . . * . . * . . *

「娘、礼をいう。そうだな。お前は脆弱ぜいじやくそうだから、あれをくれてやるっ」

帰りのトラップの前まで来て、エルさんは思い出したように長い袖を優雅に押さえ、お座りでスタンバっている犬の方を指差す。そのしつぽがものすごい勢いで振れているのだが、これは私への好意と受け取ってもいいのだろうか？むしろ“ご褒美”のエサ認識じゃないかと不安が首をもたげる。あの子食べていいよー、みたいな。

「うーん…わんちゃん使役できるほどステータス良くないですから、お礼言ってもらっただけで十分です」

「なに心配することはない。使役の呪まじないはステータスに刻んでやる故、

死ぬまでお前には逆らえぬよ』

「エサとか何あげればいいんですか？」

『あれは大気に漂う魔気を吸収して生きておる。放っておいても死なん』

「そうですか。ちょっと安心しました。魔物ってたしか伸縮自在でしたよね？」

『パシーヴァ、小型になねば娘が受け取らぬと言っておる』

つややかな声でエルさんが言うと、犬はガーウと一声上げてみる縮んでいく。どないな構造してんねん！？と前の世界の方言で突っ込んだのは言うまでもない。

「では、いただきます。どうもありがとうございます！」

受け取りを宣言すると犬は犬らしくハツハツハ言いながらこちらへ駆けってくる。

お手をする前に、ステータス・カードを取り出して。

冒険者 ベルリナ・ラコット 18歳 女
レベル 15

体力	20	知力	80	魔力	56
----	----	----	----	----	----

スキル 家事 8 / 10

細工 5 / 1 0

交渉 6 / 10

搜索
Max

特殊スキル 絶対回避 Max

- - - - -

?? おや?どこに刻まれているのだろう??

首を傾げる私に気づいてか、いつの間にか近くに立っていた勇者様がステータス・カードの表面をツンとなぞる。

- - - - -
- - - - -

契約 魔獣パシーヴァ：従属

- - - - -
- - - - -

?? おおっ!?!まさかのタッチパネル!!し…知らなかった…!

「ありがとうございますっ」

頭を下げる私に勇者様は「いや」とだけ返す。

よし。契約されているならこっちのものだ、と早速しゃがんでお手をさせる私。

犬はガウツとなんとも可愛い声を上げて、しつぽを振り振り両手を一度に乗せてくる。

「ふおおおっ…なんとかわゆき生き物かつ…!」

あ、しつぽのところがなんか誰かに似ているな?と思ったところで、ふわっと浮遊感に包まれる。

ん?と横を見れば見慣れた軍服様相の勇者様の胸板のあたりが。

胸板のあたりが…?

「ゆゆゆ勇者様！？こつ、これは一体！???」

???え、お姫様だつことか誰得？あ、これが俺得ってやつかしら??

パニクる私の頭の上から、落ち着いた声が降ってくる。

「立っているのが辛いんじゃないか？」

???なつ何故にそれをご存知で!?

「いつも移動に6時間以上かかると姿が見えなくなる」

エスパーさながらの回答に開いた口がふさがらない。

かあつと一気に熱くなる顔を俯けながら、スカートの端をぎゅつと握る。

この状況はすごく恥ずかしいけれど、恥ずかしいながらもなかなか嬉しいものがある。

だってこれって全乙女の夢でしょう!?

前世じゃ夫の腰が気になって、お姫様だつこして！なんて頼めなかったことを思えば尚の事。

このファンタジー世界では筋力の上限が途方もないことになっている。それが勇者なんて職業の人だったら尚の事。こんなに軽々と苦もなく持ち上げられてしまったら、胸キュンしすぎて気絶してしまつかもしれない。もったいないからしないけど！

???あああ…もうすつごい、すつごい、良いにおいー！これ何て媚薬???胸板広いー!!!引き締まった体サイコー!!!ここでさり気な

さを装って体ごと寄りかかったりして…きゃっ　（＊／＼）私って
ばなんて破廉恥なーっ！！！！

傍から見たら完全恋人な状況に、うつとりトリップする私。
間違つて昇天しないようにしなければと思うものの、俯けた顔の
中でどうしても口元が緩んでしまうのを抑えられない。

「幸せすぎて死にそうです…」

小さく呟いた声は発動したトラップの輝きと共に、そのまま空間
に溶けていく。

* . . * . . * . . * . . * . . *

勇者の嫁になりたくて。

異世界からの転生者、ベルリナ・ラコット18歳。

心地よい揺れに意識を手放し、気づいたら宿のベッドの上だけど。
明日も追います！愛しい私の勇者様

（後書き）

前作をご存知の方々、今回いろいろ説明を突っ込んでしまってますみません…。

簡単に！がモットーなのに…反省しています。

でもここで説明を強化しておけば世界観の足固めができて、続編が簡単な文章でもわかりやすくなるはず！きつと！（もごもご…げほっ）

余談ですが、レプスさんの愛用の杖の名は流星の杖という設定でした。魔法使いの杖はワンド、ステッキ、ロッドの三つの型があり、ヤフ知恵でベストアンサーを貰っていた回答を参考に、上から持つところが曲がついているもの、短い棒、長い棒、という使い分けをするという仕様になっています（作者の心の中で）。

ちなみにベルが改良した創星の杖はロッドタイプで、持つところが長いです。結局いずれも日本語のままにすることにしました。候補はロッド・オブ・クリエーション・スターズだったんですけどね。

長いし英訳に自信がなかったのでやめときました。

また、職業：勇者な人たちは他職業の武器の名前と効果がわかる仕様になっています。なぜなら勇者はどんな武器でも装備・使用できるためです。説明を挟みませんでした但し気がついてもらえたでしょうか？…そうですね、わかんないですね…すいません。いつか誰かに説明させます。

今回は布石をいろいろ残してしまったので、後で回収できるかちょっと不安だったり…（ー、；

登場人物達のバックグラウンドもそのうち書けるといいなあ。

お、まさに後書きっぽい（ノ。o。）ノばんざい

最後に、本小説を読んで下さりどうもありがとうございました。
それではまた。

微妙に改稿しました。 10/24、2011
ストーリーの流れに変更ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8297x/>

勇者の嫁になりたくて(´ ˘ `*)ゞ 2

2011年10月28日21時34分発行